

マシュー・バーニー、キャロリー・シュニーマン、白髪一雄、田中泯
 ファーガス・マカフリー 東京

2020年10月15日(木)~2021年1月23日(土)

ファーガス・マカフリー東京は10月15日(木)より、マシュー・バーニー、キャロリー・シュニーマン、白髪一雄、田中泯による四人展を開催します。

本展は各世代を代表するアーティスト4名による作品を一緒に展示する初めての機会となります。作品がみな作品制作という行為を強く意識させる本展は時代、東西を超えた「身体性」について考察します。究極の「アクション・ペインティング」と言える、白髪一雄による1955年のパフォーマンス・アート《泥に挑む》(1955年)はダンス、パフォーマンス、絵画、彫刻が交差する作品の原点とも言えるものでした。現在は記録として残るのみであるこの作品は、表現のツールとしての身体をアーカイブ化することの重要性、そして時間と空間という非物質的で可変的な要素を捉える必要性を予見するものでした。このパフォーマンスは白髪に続く世代にとって非常に重要なインスピレーションの源となります。白髪一雄、マシュー・バーニー、キャロリー・シュニーマン、田中泯の作品を通し、創造を望む作家たちの衝動から生まれる身体のエネルギーと、それをいかに記録するかという挑戦の軌跡が明らかとなります。



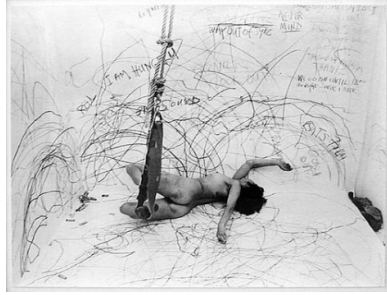
吉原治良の実験的な運動に触発された白髪は1955年、彼が結成した具体美術協会に入会し、手、指、足を直接用いることで油絵具と泥における重量、粘着性を探求し始めました。パフォーマンスと絵画を融合することにより、物質を操作し使用する行為を、全身を活性化させるプロセスとして捉える、演劇的な展望を見せ始めます。体重を支えるロープによって空中に体をとどめ、白髪は自身を描くという行為に沈み込ませていきます。大量の濡れた物質を置き、同時に踊りの振り付けを守るかのように体を制御することに意識を向けるのです。

本展で展示される、黒の単色で構成され、今までほとんど展示されることがなかった白髪作品《蛭子》(1992年)の表面には、体を滑り込ませ、緊張させ、即興で動かすことで動きとエネルギーを生み出す身体の軌道をとどめるという、1950年代後半の紙の作品から何十年にもわたる、他に類を見ない作家の取り組みが力強く表れています。

田中泯は、感覚的に調整を加えるという、精神物理的な探求において白髪と共通点を持ちます。この探求はピエール=フェリックス・ガタリが1984年田中へのオマージュとして記した「闇のイルカ 日本の奇跡の足の下に」という言葉によって再定義されます。Covid-19パンデミック渦、山梨県での隔離生活中に撮影された15分のホームメイドの映像は世界中が体験しているコロナの影響による非現実的な現状を反映しているかのような、感情に溢れ、絶妙な物理的ニュアンスに富んだ身振りを捉えています。撮影地は白州の山中に位置し、1985年から土地、動物、古くからある地元農家と深い関わりを持つダンサーのコミュニティーの拠点である「身体気象農場」。緩やかな、しかし同時に厳格な映像構成を通し、その環境が伝えられています。公と私の間を行き来しながら、農場設立の1年前に建てられ、その後放置されたステージ上で



田中の精密な動きは展開していきます。そしてこれは舞台の設置を手助けした、原口典之（1946年～2020年）へのオマージュでもあります。



主にパフォーマンス・アーティストとして認知されるキャロリー・シュニーマンですが、イメージと、イメージの作り手が合体した行為としての絵画への取り組みが、彼女の作品のプロセスの基礎となっています。2018年 MoMA PS1 で開催された回顧展「Kinetic Painting」展では《Meat Joy》(1964年)などパフォーマンス的コラボレーションの作品が紹介されました。この作品では人間と、人間ではないアーティスト本人、プラスチック、家禽、魚、ロープ―役者たちが事前に決められたスコアと

即興の間を行き来しながら、予想がつかない展開を見せていきます。ファーガス・マカフリー東京に展示される《Up to and Including Her Limits》のパフォーマンスは1970年代に何度かパブリックで行われ、そして最後の1回はアーティストのスタジオで彼女の死の1年前にプライベートで行われました。アメリカ戦後美術と明らかに直接的な関連性を持つこの作品は、男性優位のその領域に、それまで女性参加を拒否し続けた美術史に対する鋭い理解を吹き込みました。樹木外科の専門家が使うハーネスで体重を支え、器具を上下に動かすロープによって体の動きをコントロールする装置に体を設置し、「drawing variant」（ドローイングのバリエーション）、ペンシル・クレヨンによる次々と展開する網を描いていきます。その時、彼女の「全身が視覚の跡の仲介者となり、運動の中にある身体エネルギーの痕跡となる」のです。《Up to and Including Her Limits》は作家が編集したパブリック・パフォーマンス(1973～76年)の映像とともに展示されます。

シュニーマンの次の世代に生まれたマシュー・バーニーは強制力や抵抗に対抗する道具として身体を用いる作品に長年取り組んできました。1980年代に始まり現在も進行している

《DRAWING RESTRAINT》シリーズは進行し続ける、個人的な行為を捉えた映像、ドローイング、彫刻と言えます。バーニーは作品を形にしたいという制作意欲の前に自ら妨阻を置き、その障害物に直面し克服していきます。その過程における作品制作と競技的な身体トレーニングの相互関係の中で作品が成立しています。

長編映画、大型彫刻、写真作品群から成る《DRAWING RESTRAINT 9》(2005年)はバーニーの日本文化に対する研究と、そこから受けたインスピレーションの結果であり、日本文化と「変容」との関係性を物語っています。多くの議論がなさせる捕鯨工場船が映画の主人公であり、

《DRAWING RESTRAINT 9》の要素の一つである《The Cabinet of Nisshin Maru(日新丸)》(2006年)はこの捕鯨船が持つ特性を強調しています。本展に出品されるこの彫刻作品は自己完結型の「うつわ」として機能し、船のいかり、ホースノズル、東洋からの客人たち(バーニーと、ミュージシャンのビョークが演じている)が映画終盤で変容を遂げる際にお互いの体を切り込むナイフといった、物語の重要な要素が象られています。またこの彫刻作品は、捕鯨船のデッキ上で船長であるバーニーの指示のもと、彫刻を製造している乗組員の姿と船体を写した写真のセットでも扱われています。



4名のアーティストによる作品を一堂に展示する本展は、すでに確立されていた形、物質、構成についての美術史的解釈に挑む革新的なビジョンを組み立て、ダンス、パフォーマンス、絵画、彫刻を通して現される人間の具現化における共通言語を発掘していきます。バーニー、シ

ユニーマン、白髪、田中はそれぞれの多様なアプローチでパフォーマンスを行い、動的な身体性についての個人的な哲学を体現し、そして身体を手段とすることによって、ピエール＝フェリックス・ガタリが1984年に田中へ宛てたオマージュで記した「物語という筋書きの向こう側の器官なき身体。」²を達成しています。

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってまいりました。マーシャ・ハフイフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。日本の美術や文化と深く沿うため2018年3月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道にスペースを開設。2019年、20年は、アリ・マルコポロス、ジャスパー・ジョーンズ、マーサ・ユングヴィルト、リチャード・セラら個展を含めた、多様なプログラムを展開しました。

プレスに関するお問い合わせ：

電話: +81 (0)3 6447 2660

メール: tokyo@fergusmccaffrey.com

Images:

1. Kazuo Shiraga, *Challenging Mud*, 1955 (3rd execution) © Estate of Kazuo Shiraga; courtesy Amagasaki Cultural Center
2. Min Tanaka, *Dance in the desert village* (photograph), 2010 © Min Tanaka
3. Carolee Schneemann, *Up to and Including Her Limits*, 1976. Performance, Berlin © Carolee Schneemann; Courtesy of the Estate of Carolee Schneemann, Galerie Lelong & Co., Hales Gallery, and P•P•O•W, New York; Photograph by Henrik Gaad
4. Matthew Barney, *DRAWING RESTRAINT 9: Nisshin Maru*, 2005. One of four C-prints in self-lubricating plastic frames, panel: 41 1/2 x 33 x 1 1/2 inches each (105.4 x 83.8 x 3.8 cm) © Matthew Barney

来場者様へのお知らせ：

ファーガス・マカフリー 東京では政府のガイドラインに沿った感染防止対策を行います。ご来廊いただく際は、マスクをご着用いただく事、また中にお入りいただく際にアルコールで手指消毒をお願い申し上げます。正面入口にて、スタッフより非接触検温機にて体温測定のご協力をお願いすることと致します。万が一の際連絡を差し上げられるよう、ご連絡先の記入をお願い致します。スペース内の利用に関して、1度にご来場いただける人数を4名までとさせていただきます。最後に、発熱や咳などの症状がある場合はご来廊をご遠慮頂きますよう何卒宜しくお願ひ申し上げます。

Map:

(表参道駅 A3 出口)

